

第2回将来の運用容量等の在り方に関する作業会 議事録

日時：2024年8月29日（木）10:00～12:00

場所：電力広域的運営推進機関 第二事務所会議室〇（Web 併用）

※五十音順、敬称略、◎は座長、○は座長代理
（メンバー）

伊佐治 圭介 送配電網協議会 電力技術部長

◎ 市村 拓斗 森・濱田松本法律事務所 パートナー 弁護士

河辺 賢一 東京工業大学 工学院 電気電子系 准教授

○ 辻 隆男 横浜国立大学大学院 工学研究院 教授

永田 真幸 電力中央研究所 グリッドイノベーション研究本部 ネットワーク技術研究部門長

松村 敏弘 東京大学社会科学研究所 教授

（オブザーバー）

三浦 修二 電力・ガス取引監視等委員会事務局 ネットワーク事業監視課 課長補佐

杉原 裕子 資源エネルギー庁 電力・ガス事業部 電力産業・市場室 室長補佐

久保山 潤 資源エネルギー庁 電力・ガス事業部 電力基盤整備課 電力流通室 室長補佐

藪野 成人 北海道電力ネットワーク株式会社 工務部 系統運用グループリーダー

中村 義和 東京電力パワーグリッド株式会社 系統運用部 系統運用計画グループマネージャー

大里 賢一 東京電力パワーグリッド株式会社 系統運用部 系統運用技術グループマネージャー

吉田 貴之 関西電力送配電株式会社 系統運用部 系統技術グループチーフマネージャー

配布資料：

- （資料1） 議事次第
- （資料2） 委員等名簿
- （資料3-1） 系統特性定数について（送配電網協議会）
- （資料3-2） 系統特性定数に関する検討の方向性について
- （資料4） 系統混雑に対応したフリッジに関する検討の方向性について
- （資料5） 制約要因一覧等を踏まえた今後の主要論点について
- （参考資料1） 地域間連系線における制約要因一覧
- （参考資料2） 地内制約要因一覧（北海道電力ネットワーク株式会社）
- （参考資料3） 地内制約要因一覧（東北電力ネットワーク株式会社）
- （参考資料4） 地内制約要因一覧（東京電力パワーグリッド株式会社）
- （参考資料5） 地内制約要因一覧（中部電力パワーグリッド株式会社）
- （参考資料6） 地内制約要因一覧（北陸電力送配電株式会社）
- （参考資料7） 地内制約要因一覧（関西電力送配電株式会社）
- （参考資料8） 地内制約要因一覧（中国電力ネットワーク株式会社）

(参考資料 9) 地内制約要因一覧(四国電力送配電株式会社)

(参考資料 10) 地内制約要因一覧(九州電力送配電株式会社)

(参考資料 11) 地内制約要因一覧(沖縄電力株式会社)

議題 1：周波数維持に用いる系統特性定数等について

- ・送配電網協議会伊佐治メンバーより資料 3-1, 事務局より 3-2 にて説明を行なった後、議論を行なった。

〔主な議論〕

(辻メンバー) ご説明いただき感謝する。資料 3-1 では系統定数に関する現状を説明いただき、理解が深まった。その中で系統特性定数は、時々刻々と系統の条件によって変わるものだと教えていただき、シミュレーションを詳細に行うことで、緊急時含め、どういった周波数の低下が起きるかを再現することは可能である一方で、全てのケースに対応させていくことは、現実的でない部分もあるので、実務上非常に有効な対応の仕方として、系統特性定数という位置づけがこれまで活用されてきたところをご説明いただき、そういった部分でのメリットがあることを再認識した。系統特性定数を活用しないで運用制御等されているエリアもあると話していただいたが、本日説明いただいた話を基に、系統特性定数を用いることの特質をしっかりと整理していただいた上で、資料 3-2 の資料にもあったように、系統特性定数の必要性の議論も引き続きできれば良いと考える。資料 3-2 の系統特性定数の必要性について、関連するところで幾つか発言だが、系統特性定数に関しては、今あったとおり系統条件に応じて変わる。そういった中で、ご説明いただいた過去の系統特性定数の決め方でいうと、周波数の落ち方に色々バラつきがある中で、少し安全サイトで保守的に線を引き、系統特性定数として活用されてきたという図があったかと認識しているが、今後将来の運用容量という趣旨に照らしていくと、将来再生可能エネルギーが増えていった場合に、周波数の落ち方のバラつきは、系統の条件に応じて不確実性が高まっていくと考えており、そういった中で、シミュレーションを通じて、現象を確認、模擬していくことの重要性も高まると感じている。シミュレーションを通じてこういったところの分析をする時の方法論、考え方、そういったところについても、ご提案の中にあっただが、良く確認していただき、引き続きシミュレーションのかけ方についても、考え方の整理ができるといいと考える。時間帯毎にバラついて、系統定数が動いていく中で、それを毎回正確に取り扱うのは難しいのは勿論そうだが、今やっているように、系統毎に固有の値として一つだけでいいかどうかは、見直す余地もあるかと考えており、例えば再生可能エネルギーの出力が非常に高い時間帯と、そうでない時間帯で系統の慣性が変わってくるので、周波数の落ち方が違うとか、そういう実務上、過度に難しくしない範囲で系統特性定数を複数用意する等、時間帯毎に変わるというところに対する対応の在り方の必要性も確認できると良い。平常時の話については、資料 3-2 の広域 LFC の 2026 年以降の話題でもあったが、平常時における系統特性定数の必要性については、過去の需給調整市場検討小委員会の議論の中で、広域 LFC のロジックを説明いただいた時に、AR を計算しそれをネットィングした上で、LFC の制御速度等、経済性を加味してエリア毎の出力の指令値を決めていくようなロジックと認識しているが、その当時にも議論があったと認識しているが、系統特性定数が多少不確実であっても、そんなに影

響を受けないような説明があったように記憶している。その辺り、系統特性定数をどのくらい正確に計算していく必要があるかというところは広域 LFC の原理に基づいて、理論的に確認できるところと考えているため、そういった視点での検討をいただくと良いと考える。

(永田メンバー) 資料 3-1 では現状とこれまでの実績も含めて、非常に丁寧に整理していただき感謝する。10 ページの系統特性定数と実績対比では大体基準値とおりにという説明であったが、辻メンバーからもお話があったように、資料 3-1 の 10 ページ右側の緊急時に関わる場所について、系統特性定数が事前の解析や検討であったり、系統安定化システムのパラメータ設定で使う数字であることから、実態として事前に想定した以上に周波数が落ちると困ることになるので、実態は安全サイド、この図でいうと線の上側に出てほしいと認識している。基本的に上側に出ているので問題ないというところを示していただき、大変良いことだと考えている。他のご議論の中でも、こうしたところを丁寧にお見せいただければ、ありがたいと感じた。

資料 3-2 について 3 点ほどコメントさせていただく。資料 3-2 については、資料 3-1 でご説明いただいた点を踏まえての論点整理というところで、具体的な議論はこれからという認識である。資料 3-1 でも色々ご説明いただいたが、資料 3-2 では、多くの論点が現在の需給バランスを確保する、周波数を維持するということ、どうしているかを考えて、どうしているかということにかなり絡む話なので、是非議論を進めていく上で現状の考え方、やり方を、技術的には基本的な点も含めて丁寧に拾っていただき、それを踏まえた上でどうするかという議論を、是非お願いしたい。

大きな論点として 3 点まとめていただいた、3 点目のところで、系統特性定数の再算出という話をいただいているが、これ自体は論点として十分あるだろうと感じているが、仮に今回再算出という結論だったとして、何かしらの数字を頑張ってお出したとしても、それで終わりということにはならない。将来の時点で見直すという話が当然出てくるので、そうした議論の役に立てばという観点で、どういうところで見直しの必要性を認識して判断していくか等を考えないといけないと認識している。再算出して値がどうなるだけではなく、再算定の必要をどう捉えるか等、そういう時に何が使えて、今、足りない物があるとすれば、どのようなことを考えなくてはいけないのかを含めて、少し幅広い議論をさせていただくと、ベターではないかと考える。これは非常に難しい話で、クリアな結論が出るとはなかなか思えないところではあるのだが、せっかくこういうご議論させていただいているところなので、そうしたことも含めて議論をさせていただければと考える。

今の話と絡むが、系統特性定数を再算定する時に、緊急時のグラフの右側の数字には、やはり負荷特性が効いてくるという領域になる。我々も研究をやっているが、負荷特性はなかなか捉えがたいというのが正直なところで、シミュレーションするにしても発電機側の特性は色々モデル化されていて、これまで電力会社が特性を把握されているところがあるので、ある程度、シミュレーションの中で精度が確保されたモデルで模擬しているところがあるが、負荷特性は対象となる設備も色々あって、それを全体として見た時に、なかなか扱いが難しいところがある。シミュレーションで確認という話が出ていたが、シミュレーションすると言ってもできる、できないということがあるので、そうしたところ、今、限界がどこにあるかを含めて、この場で整理、共通認識を持たしていただけると有難い。

(河辺メンバー) ご説明いただき、感謝する。私からは、コメントと質問もさせていただく。まずは系統

特性定数についてだが、季節や時間帯によっても変わりうるということは、従来より知られており、本日は伊佐治メンバーより紹介いただいた電源脱落実績を見ても、正にそうであるということを示しているものだと感じた。そうした理由からも、従来より正確な系統特性定数を推定するのは、難易度が高く、これまでの運用においても、ある程度保守的な値に設定することによって、安定供給を確保してきたものであると理解した。資料3-2のまとめのページのところで示していただいている今後の論点についてのコメントだが、いずれも重要な論点ということで賛同させていただく。これらの論点のうちの系統特性定数の必要性に関する整理が先ずもって必要で、併せて系統特性定数の算定方法等、運用上限の決め方をエリア間で揃えていく為の検討、それによって生じる課題の整理に重きを置きながら、進めていただければと考える。以上がコメントで、続いて資料3-1について、2点程教えていただきたい。10ページの周波数低下実績のところ、ここでは1996年から2024年度までの実績がまとめて示されているが、近年の電源脱落実績だけに注目した時に、その過去の実績と比べて、変化の傾向は何か顕在化しているような状況なのかどうか、現状どういう状況なのかを教えていただきたい。2つめは、28ページのところで、系統特性定数を用いずに運用している例を紹介いただいているが、ここでUFRの整定に用いられている周波数シミュレーションでは、LFC制御ロジックを詳細に模擬されていると記載していただいている。このLFCモデルの中においては、系統特性定数を設定しているのではないかと考えているが、ここは理解できていないので教えていただきたい。これは今後の系統特性定数の必要性という議論にも絡むかと感じ、LFCモデルの中での系統特性定数の要否を確認させていただきたい。

(伊佐治メンバー) 10ページの過去の実績について、近年でどういう影響がでているかとのことだが、正直ここを分解してみたことはないが、ここに書いているルート断の事象等で、特段致命的に変わってきているイメージはない。もし補足があれば関西電力送配電様、お願いします。28ページのUFRの整定時の検討の周波数シミュレーションの中にLFCロジックがあればLFC制御として、平常時の需給制御の系統特性定数が入っているのではないと思うが、ここは東京電力パワーグリッド様に補足いただきたい。

(吉田オブザーバー) 10ページの分布について近年どのような傾向があるかの話があったが、こちらで実績を確認すると、結論から言うと偏った傾向は見られないような状況である。元々事故実績がそれほど多くないこともあり、上側に出たり、下側に出たり、といった状況が年によって均等に出ているような状況になっており、塊として、例えば上側に近年のものが集中したり、下側に集中したりということがなく、今見られている点の点在しているところに近年の点がバラついて表示されているという実績である。

(大里オブザーバー) 28ページのLFCの制御ロジックをどのように組み込んでいるかの質問だが、6ページの右側の需給制御のロジックに使っている0.8MW/0.1Hzを組み込んでシミュレーションを実施している。

(伊佐治メンバー) 全般的な話だが、時間帯に因って変わってくるものをどう精緻化する等、色々課題はあるが、進め方として、ただ変えることが目的というよりは、安定供給に支障がある、事業者の制限になっている、再生可能エネルギーの導入がなかなか進まない等、色々な課題があってそれに対して解決策を検討していく中で、周波数に関しては、系統特性定数が一要素として出てくる。結局、系統特性定数をどうしようか、負荷制限、電源制限をどうするかということとセットで出

てくる一部であり、当然、別のやり方や数値をみなすことには、真摯に対応すべきだと考えているが、あくまで個別の検討になっていく。こういった個別の検討の積み重ねや工夫の上に成り立って、今の制御体系や系統特性定数の活用があり、系統安定化システムもそういった中で作ってきたということで、個々の値自体というよりは、どういう考え方で、何を解決する為にどうするかの方が、重要かと考えており、資料にも記載があったが、重点的に検討すべきものを洗い出していくということ、何故それを着目しなければいけないのかを、しっかり検討しなくてはならないと考えている。実際制約の決定要因になっていないところの定数を深掘りしても問題の解決にはならないので、問題の解決になるところをやっていくべきと考える。例えば、10 ページの系統特性定数も、おそらく電気学会か何かの検討で、負荷特性が小さくなっているのは見えていて、小さくなるとどうなるかという、この傾きを大きくする、下に下がるような傾きになるはずで、その結果、何が起こるかという制約がきつくなる。実際シミュレーション等の結果はそうだが、事故時の周波数実績としてそこまで落ちていない中で、そのようなものに変えていくべきか、というのも含めて、最後はどんな信頼度、どんなリスクを見て、それにどう対処していくかとセットで議論すべきと考える。

(事務局) 多岐に亘るご示唆、ご質問対応いただき感謝する。辻メンバーからいただいたところから回答させていただく。ご指摘のとおり、今回現状というところは明らかにした上で、様々な運用のやり方があったと認識しているが、系統特性定数を用いない運用というところも含めて、しっかり整理をしていくところは方向性としては有り得るだろうと考える。他の方々からいただいたコメントと重複するが、再生可能エネルギーの影響を鑑みると、時間帯や月別での乖離も発生するのではないかとということも含めて、シミュレーションでの再現の重要性ということもあり、シンプルに管理をするというところの優位性もあるので、こういった在り方があるかをしっかり整理していきたい。広域 LFC に関しては過去、需給調整市場検証小委員会で議論したというところは、ご指摘のとおりだと考えており、AR をネッティングした上で、メリットオーダー運用するというロジックにおいては、系統特性定数、要はフィードバック制御の傾きを多少変えることよりも、指令間隔が 1 秒なのか、2 秒なのか、そういった検討の方が支配的だったと記憶しているが、そこも踏まえた上で、変えなくても良いなら、その理由を改めて整理していくようなアプローチになるかと考える。河辺メンバーからいただいた検討の論点として全般には賛成いただいたところであるが、三つについて優先順位を付けるとすれば必要性からということはお指摘のとおりと考える。この辺り、伊佐治メンバーからご意見いただいたところとも重複するが、そもそも制約になっていないようなところを見直したところで、労力を費やすだけで意味のないことであるのはご指摘のとおりとも考えるので、環境変化も踏まえた上で、真に目指すところがどこなのかを精査した上で、しっかりやっていきたい。その上で今回、数十年前の系統特性定数をいつまでも使っているという実態もあるので、まず、現状において妥当なのかという観点で、一つの見直しのキックになっていると考えているが、今後どうやっていくかに関しては、現時点で答えはないので、先程、メンバーの方からも再生可能エネルギーの影響に伴って、色々変わっていくこともあるのではというご意見を頂いているので、まずは、一つの機会として見直してみるというところに合わせて今後、こういった環境変化に応じて対応していくかご議論させていただければと考える。

(市村座長) 活発なご意見いただき感謝する。一般送配電事業者の皆様におかれましては、現状の系統特定

定数の実態につきまして、ご説明いただき感謝する。今回、こういった実態というところを丁寧に説明いただいたこと、非常に意味があり、先ほど来議論があったところではあるが、そういった事態を踏まえて、現状の環境変化や、技術的な知見の変化、こういったところを踏まえて今般見直すべきかどうか、それは何を見直すべきか、こういったところを着実に議論していくことが重要と考えているので、事務局におかれましても、今後引き続き関係各所と連携した上で、系統特性定数について検討を進めていただければと考える。

議題 2：系統混雑に対応したフリンジに関する検討の方向性について

- ・事務局より資料 4 で説明を行った後、議論を行った。

〔主な議論〕

(辻メンバー) ご説明いただき感謝する。今後の論点について整理していただき、方向性としては異存はない。技術的なことに加えて、影響が限定的なためということで、フリンジの取扱いを織り込んでいないところにおいて、合理的な説明ができるかどうか、そういったところも含めて、前回の本作業会でもあったが、どういう基準で考えていくのが合理的なのか、全体的な視点も含めて、検討を進めることができれば良いと考える。その中で、二重に控除しているようなところもありそうだとこのところも見えてきたが、その点も併せて是非、検討を深めていただければと考えている。熱容量のところ、一つだけ、コメントさせていただくが、N-1 電制等踏まえて常時から 100%まで流すようなケースが出てきた時に、それに対してフリンジが乗ってきた時に大丈夫かというところは、きちんと確認しないといけないと認識している。そのプラス α というような形で書いていただいたフリンジのところ、ご説明にもあったように、今後、将来的なことも含めた時に、変動量や変動周期がどのように現状はなっていて、今後どう変わっていく可能性があるかというところをしっかりと、定量的な検討をしていただくのが大事だと理解している。短時間容量の話で考えた時に、14 ページだと一般的に短時間 10 分程度と書いてあるが、程度というところが、大体何分まで大丈夫かというところも、今の話にリンクしてくるところだと認識しており、短時間の限度と変動周期との関係から、常時 100%流しても大丈夫なのか、というところを深掘りしていただきたい。後は、再生可能エネルギーが増えてきた中で、そもそもフリンジがどれくらい大きくなっていく可能性があるか、これは調整力の発動に加えて、再生可能エネルギー自体の変動というものもあるので、それを含めて今後どう変わっていくか、そういった再生可能エネルギーのフリンジへの影響は、過去の委員会でも議論があったと認識しているが、その時はあまり相関はないかという結論だったが、より大量導入が進んできた中では、その限りではないという可能性もあると認識しており、その辺りも検討いただければと考える。

(河辺メンバー) 私からは、コメントと質問を一つだけさせていただきたい。まず、コメントとしては、全体としてご提案の方向で進めていくことで異存はない。質問だが、39 ページに示していただいている論点のところ、地内送電線の方では、EDC 成分を考慮していると整理していただいているが、その方法として、今回移動平均値を使っているということをご説明いただいた。移動平均値を出す際の時間間隔によって、どういう成分を考慮するかが変わってくると認識しているが、どういう考え方で設定されているのか等、考え方がエリア毎に統一が取れているのか、取っていく必要があるのか等含めて気になったので、教えていただきたい。

(伊佐治メンバー) 私からコメントさせていただくのは、39 ページでフリンジの実績や、将来的な調整力運用方法を踏まえて検討を進めると書いていただいているとおおり、現状の運用と将来の運用は、ここで目指しているのは大分ギャップがあるのかと感じた。フリンジをどういう定義で算出していったそれがどういう運用の結果で流れたものか、新しい運用にした時にどのような影響があり、その影響を考えると、どういう定義でフリンジを設定すべきなのかを、しっかり検討していく必要があると考える。地内は EDC 運用も含めていると話があったが、例えば地域関連系線のフリンジは、AR を目標値にして計画値に引き戻す制御の結果、周波数が目標値となっていれば、基本的に 0 になるように調整した結果であって、意図的に ΔkW を発動して流しているものではない。例えば、EDC 成分を指令によって運用容量を超える指令を出すということになると、その指令の上に更に変動が乗って来ることになるので、今のフリンジとは少し違うと考えており、地内送電線も一緒に、私のイメージは 30 分計画値ベースで潮流をチェックする時は、30 分に出てこないフリンジを見ておかないといけないので、その分引いていると考えており、運用の中で ΔkW の発動によって運用容量を常時超過しているのを甘んじているのかということ、そうでもない気がしている。特に SCUC、SCED を入れていくことは、運用容量を設定して、その範囲内に ΔkW の発動も含めて収めようとしていくはずで、運用容量とフリンジの関係を、現状の運用の確認であったり、将来の次期中給ベースの運用になった時の影響の確認をしっかりする必要性があると考えている。

(永田メンバー) 表現だけの話になるので申し上げにくいところであるが、22 ページの赤線の部分の N-2 以上は想定していないという表現があって、これは運用容量を考える際には、このとおおりだが、これだけを見ると、リスクとしてそもそも考えていないように見えてしまい、気になった。先程、伊佐治メンバーから、リスク、信頼度をどう考えるかという話をさせていただいたが、リスクとしていわゆる N-1-1 のような事象を考えていないわけではなくて、それは緊急時の対応でというように整理になっていて、運用容量に関する対象範囲に収めていないというところだと理解している。その辺は誤解のないように丁寧に説明して欲しい。

(事務局) メンバーの皆様方、多岐に亘るご意見いただき感謝する。全体的な方向性、論点に関しては、同意いただけたと考えている。辻メンバーからいただいたところだが、熱容量の着眼点についてはコメント頂いたとおおりと考えており、フリンジとして乗る成分がガバナフリーや LFC であれば瞬間的に戻るということも有りうるので、寿命に与える影響というのは軽微ではないのかというのは変わらないのかなと考えている。一方で、短時間熱容量の概念がどの程度なのかということも設備等で変わるところであり、10 分のところもあれば、30 分のところもあり、EDC 成分が、5 分、10 分といった領域になってくると考えると、EDC が常にフリンジとして乗り続けるとやはり、リスクがあるのではないかという観点も有り得ると考えており、こういったところフリンジという一つの考え方で論じているが、時間内の変動なのか、EDC 成分なのかということでも取り扱いが変わってくるので、その辺りはしっかり丁寧に整理したい。また、再生可能エネルギー導入が進んだ時にフリンジがどう大きくなっていくかということに関しても、現状すぐに推定する手法があるわけではないが、基本的にはフリンジは、過年度の実績に基づいて算定するため、変動が少し増えていくと、それがフィードバック的に反映されて大きくなっていくと認識しており、そこを一定程度予測した上で先回りして捉えることができないのかという観点、そういったことが取り得るのかも含めて、整理が必要かと考える。河辺メンバーからのご意見について

は、正に今の話と絡むところだが、サンプリングの周期によっても、取り得る領域の値が変わってくるということはお指摘のとおりと考える。この点、伊佐治メンバーからいただいたこともとも被るが、現行は30分同時同量制度という話の中で、30分コマ単位の潮流しか見れないことがあり、30分の内数で生じうるEDC成分を含めた潮流の変動等をピックアップしたいと考え、そういった観点からは、サンプリング周期的なことというのと、30分移動平均値というところを使っているのが大宗と考えており、こういった成分をみたいのかとの裏返しといったところで、どのようなピックアップの方法が取られるのか、各成分に対しどう対応するかという観点を合わせながら各エリアの実態を踏まえて、どうあるべきかというところ検討に繋げていきたいと考える。伊佐治メンバーからいただいた意見もごもっともだと考え、現行のP0を守るTBC制御と広域LFCでは、制御方法自体が変わりうると考えており、フリンジとして乗って来る成分が制御方式によっても変わってくる将来があり得ることも念頭に、こういった成分に対して対応していくべきかを、しっかり精査していく必要がある。永田メンバーから頂いた意見に関しては、こちらの思いとしては、前回信頼度基準・クライテリアの説明でも紹介させていただいたように、想定故障N-1,N-2まで見ていると言ったところ、あくまでもN-2は、同じ地点のダブル故障ということで、こういった観点で異地点での同時発生というところは、なかなかカバーしづらいところもあり、信頼度基準上は、想定外の扱いになると考えている。実際に発生した際の対応に関しても、リスクを見ながらしっかり対応していくものだと考えるので、誤解ないようにというご示唆は仰るとおりと考えている。

(市村座長) 活発なご意見いただき感謝する。今回、事務局におかれましては、フリンジに関する検討の方向性について、丁寧に説明いただいた。次回以降、今回整理した論点について、引き続き、関係各所と連携をしていただいて、検討を進めていただくようお願いする。

議題3：制約要因一覧等を踏まえた今後の主要論点について

- ・事務局より資料5で説明を行った後、議論を行った。

[主な議論]

(永田メンバー) 非常に膨大な情報をこのような形で整理していただき感謝する。現状というところで、拝見すると、例えば各地内の情報ということで24ページにまとめてあるが、こうした形で特に想定故障や判定基準といったところで、エリアによって程度はともかく差異があるところが見られることが現状と理解した。これからの議論で、こうした差異がどうかということの話を進めていくことになるだろうが、運用容量は、各エリアがこれでもって、自エリアの信頼度を維持してきた、ということもあるので、エリアによって系統も違い、これまでに信頼度維持でどういう経験をしたか、何を考えてきたのかということも、それなりに差異があるかと考えている。そういうところを是非丁寧に拾っていただき、その上でどういう方向にいくかということを議論させていただきたい。

(事務局) 大変貴重な意見をいただき、感謝する。仰るとおり、今後こういった方向性にするかは、検討結果次第であり、今の実態、ここに至った経緯というところで、各エリアの考え方を比較する重要性は変わらないと認識している。あるいは前回から多数いただいているご意見でもあるが、必ずしも統一することだけを目的とするのではなく、差異があれば差異がこういった理由なのか、そ

れが合理的なのかを整理する観点も必要かと考えている。そういったところが妥当な理由になりうるのかという観点も含めて過去の経緯を抽出した上で、しっかり整理をしてきたい。

(市村座長) 事務局におかれましては、丁寧に関後取り組んでいくべき、主要論点について丁寧に整理していただき、感謝する。今回、整理した論点について、引き続き関係各所と連携の上、検討を進めていただくよう、よろしく願います。本日は各エリアの運用の実態や、それを踏まえた今後の検討の論点ということで、示していただき非常に意味のある、意義の深い作業会であった。やはりエリア毎でこれだけ違いがあることが分かったということがまず一つ意味のあることであり、一方で各エリア毎に色々な考え方に基づいてこれまで運用されてきたというところ、ここはきちんと踏まえて考えていく必要があるということだと考えている。一方で素人的にみると何故これが違うのかというところが、なかなかすぐには分からないという中で、ゼロベースで見直すべきところは、見直していくと、こういったところは、きちんと議論していくことが大事ではないかと考えおり、皆様引き続きご協力をお願いしたい。

以上